

腹が立つ 腹が立つ

柿の種至上主義

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

勢いで書いた。

反省も後悔もしていない。

続くかどうかは誰にも分からない。

オリジン

目次

1



妹たちはみんな、母に似てとても素敵だ。きっと将来はもつと綺麗になるだろう。

俺は醜い。ただ一つだけ俺が誇れるのは、母さんと同じ綺麗な色をしたこの髪だけ。

年を重ねるごとに声がアレに近くなっている

—— だから死に物狂いで変声技術をおぼえた

年を重ねるごとにアレに雰囲気が出てきた

—— だから死に物狂いで気配や印象操作の技術を学んだ

年を追うごとにアレに近くなることを感じ、そのたびに新たな技術を死に物狂いでおぼえた。

だけどこの顔だけはどうしようもなかった。声をかえ、雰囲気をかえても、どんな技術をおぼえてもどうしようもないこの顔だけはかえることができなかった。

辛い思い出を想起させるこの顔のせいで妹たちと離れ離れで暮らすようになって、アレが関わったことに否応なしに巻き込まれても、好きだった母さんがくれた顔が、好きだった母さんが愛してくれた息子の顔は、変えられなかった……

いつそアレに見立てて怒りをぶつけてくれれば、煮るなり焼くなりしてくれれば、この顔に未練などなかったというのに……

『景、それに改、ごめんね』

最期の母さんの顔は美しかった。これからも一生忘れることはな

いだろう。残していく子どもたちへの申し訳なさと、俺を見て  
一抹の寂しさを宿したあの顔は。

『お父さんを許してあげてね』

目が覚める

変わり映えのしない、いつも通りの夢と視界にうつる天井。  
いつも通り体を起こし、洗面台に向かう。

顔を洗い終えて、目の前に見えた顔に反射的に体が動いた。

「…ははッ、またやってしまった」

まだ若干寝ぼけた思考の中で、拳に刺さったガラス片を取り除いて  
いく。

ああ 腹が立つ 腹が立つ